



Title	芥川龍之介『トロッコ』の裏返し構造 - 良平の「新生」場面の機能 -
Author(s)	大喜多, 紀明
Citation	国語論集, 15: 45-52
Issue Date	2018-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9740
Rights	

芥川龍之介『トロツコ』の裏返し構造

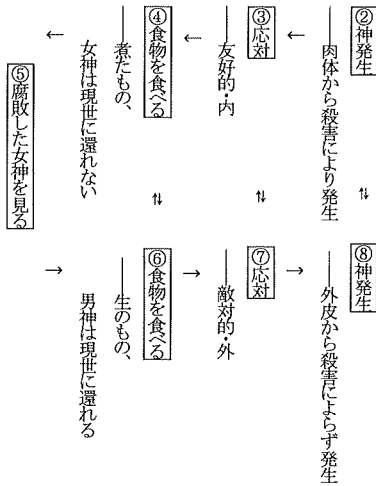
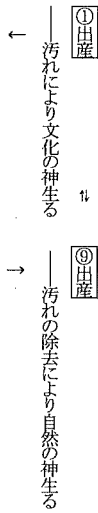
——良平の「新生」場面の機能

大喜多 紀明

一、はじめに

ルーマテのフオークロリストであるミハイ・ポツプが、ルーマテの昔話「兵士としての少女」に見いだした構造を、大林は、日本の異郷訪問譚に当てはめることにより、かかる構造が、異郷訪問譚にみとめられる構造上の「共通の約束」であるとの推論を述べた。また、裏返し構造を当てはめることによる分析手法を、大林は、「構造分析における *stratagmatic* な見方と *paradigmatic* な見方の双方を統合する試み」とみなした。なお、大林論文以降の、裏返し構造に当てはめる手法による物語分析を試みた研究には、例えば、韓国の異郷訪問譚を検証した依田論文がある。

以下は、大林論文が「イザナキの黄泉国訪問譚」に対し、裏返し構造を当てはめた事例である。



この「イザナキの黄泉国訪問譚」のストーリーは、①↓②↓③↓④↓⑤↓⑥↓⑦↓⑧↓⑨という順序で進行する。かかるストーリーの進行の次第は統辞的視点に基づく知見である。また、①と⑨、②と⑧、③と⑦、④と⑥が

それぞれ対応し、それぞれが同じテーマとなっていることがわかる。かかる対応の次第は、系列的視点に基づく知見である。

大林論文では、裏返し構造の特徴を次のように述べている。なお、引用文中の傍線と数字(①ないし②)は筆者によるものである。

それによれば、この昔話はいわばその前半と後半とが裏返しの関係になっている。つまり、①前半で問題となつたいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ②同じテーマが問題になつても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとつている。たとえば、欠如というテーマが前半に出てくると、後半では欠如の除去とという形になつている。

つまり、大林論文が述べる裏返し構造の特徴は以下の通りである。

①前半で問題となつたいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開する。

②同じテーマが問題になつても、後半ではいわば前半の否定・対立・対照とというような形をとつている。

かかる裏返し構造の特徴を「イザナキの黄泉国訪問譚」に当てはめた場合、物語前半に配置されたテーマは、①「出産」→②「神発生」→③「応対」→④「食物を食べる」という順序で配列しているのに対し、物語後半では、逆に、⑥「食物を食べる」→⑦「応対」→⑧「神発生」→⑨「出産」という順序で次々に展開している。この点は、特徴①と合致している。

また、同じテーマである①と⑨では、前半である①の要素が「汚れにより文化の神生る」のに対し、後半の⑨の要素である「汚れの除去により自然の神生る」であり、これらは互いに裏返しの関係にある。かかる裏返しの関係は、②と⑧、③と⑦、④と⑥のそれぞれの要素においても成立しており、以上の

点は、特徴②に合致するものである。

以上より、「イザナキの黄泉国訪問譚」は、特徴①ないし②の双方の特徴に合致するため、大林論文では、かかる物語の構造を裏返し構造とみなした。ここで、本稿においても、大林論文が述べた裏返し構造の特徴を採用することとする。

ここで、⑤は、「イザナキの黄泉国訪問譚」における転回点である。この点について、大林論文は次のように述べている。なお、引用文中には、筆者による傍線が付されている。

それは黄泉神と相談に行った女神がなかなか帰つてこないのを待ち切れない男神が、櫛の齒に火をつけて見たところ、女神の身は腐敗して蛆がたかり、身体各部に八柱の雷神が化生しているのを発見して驚愕したことである。このショックを転回点として話は前半から後半にうつり、逆の方向に進行を始める。

一方、本稿では、芥川の『トロツ』を題材とするのであるが、この作品に対し、大塚論文は、主人公の少年・良平の「自省と決断」に注目し、とりわけ、良平が土工からかけられた言葉に光を当てたように述べている。

良平が、土工たちに「ある言葉」を告げられ、あつげにとられた「一瞬間」は、良平自身の中で、これまで自らの力で解決すべき問題を安易に他者の力に期待・依存することにより、その問題から逃避してきた受動的な良平から、能動的な新しい良平へと脱皮した瞬間であると言える。まさにこの「一瞬間」は、良平が自らその問題と真正面から対峙し、積極的に自らの力で解決しようとする自己解決力が具備され、新生の良平へと一歩踏み出した瞬間であつたのである。

つまり、良平自身が、これまでの自分自身の優柔不断な行動を見つめ直し、二人の土工たちへの身勝手な期待や依存によつて自ら解決すべき問題を意識的に遠ざけ回避してきた行為を正し、今後再び同じ轍を踏まぬよ

うに嚴重に自らに言い聞かせた戒慎の瞬間であつたと考へるのである。

つまり、大塚論文は、土工の言葉をつきかけに、「受動的な良平から「能動的な良平」と「新生」した点に注目したのであり、かかる良平の「新生」の場面が、いわば、この物語のクライマックスであると言へる。なお、大塚論文では『トロツコ』における裏返し構造については言及していない。

以上を踏まえ、本稿では、まず、『トロツコ』の構造を、裏返し構造を照合する観点から分析することとする。そのうえで、かかる照合により得られた構造において、良平の「新生」の場面が、いかなる役割を担っているか、の考察を行うこととする。

二、テキスト

本稿では、芥川の『トロツコ』をテキストとする。『トロツコ』は、主人公(良平)が八歳の時の出来事について、主に述べられた小説である。物語のあらすじは次の通りである。なお、あらすじ中には、筆者による漢数字(一)～(五)が付されている。

〔あらすじ〕

(一)八歳の良平は、毎日、鉄道の敷設工事の見物に行っていた。その理由は、トロツコによる土の運搬の様子が面白かつたからである。良平は、土工になりたいと思うこともあつたが、せめて、トロツコに乗りたくと思つてゐた。ある二月初旬の夕方、良平は、弟と、弟と同年代程度の子どもと一緒、トロツコを見に行つた。するとそこには、トロツコだけがあり、土工たちはいなかつた。そこで、良平たちは、恐る恐るトロツコを押し出した。すると、車輪がまわつた。良平たちは、トロツコに飛び乗り、良平たちを乗せて勢いよく動いた。良平は有頂天になつた。しかしすぐに止まつてしまふ。すると、急に、土工に怒鳴られ、良平たちがトロツコに触つたことを叱つた。

(二)このエピソードの十日あまり後、良平は、今度は一人で、トロツコに近づき、そこにいた土工に「おじさん。押してやろうか？」と声をかけたところ、その土工は、これを快諾した。良平は土工に、「何時までも押していい？」と尋ねると、土工は「これも快諾した。線路が下りになつたので、土工は良平に、「やい、乗れ」と言うと、良平は乗つた。良平は、蜜柑畑の匂いを感じ、羽織に風を孕ませてトロツコに乗つた。しかし、あまりに速くまで来てしまつたと感じ、良平は、このトロツコがはやく戻つてほしいと念じるようになった。良平は、ある茶店で、土工たちからお菓子をもらったのだが、はやく戻りたい気持ちで、内心はイライラしていた。

(三)さらに進んだのち、同じような茶店で休憩していると、土工たちは、無造作に、「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞ」と声をかけられた。この言葉を聞いた良平は、一瞬、あつげに取られ、泣きそうになつたのだが、泣いても仕方がないと思ひ、線路伝いに走り、帰りはじめた。

(四)途中、懐に入れていた菓子が邪魔になつたのでこれを放りだし、板草履も脱ぎ捨てた。良平は、涙がこみ上げるのを我慢した。また、着物が汗で濡れているのが気になり、羽織を脱いで捨てた。蜜柑畑まで戻ってきた頃には、あたりはもう暗くなり、「命さえ助かれば」と思ひながら走つた。夕闇の中、やつと村はずれの工事現場まで戻り、村に入ると、家々には明かりがともつてゐた。家の門口まで戻つた良平は、とうとう大声をあげて泣いた。家の人たちは、良平が泣く理由を尋ねたが、彼はただ泣いてゐるだけだつた。

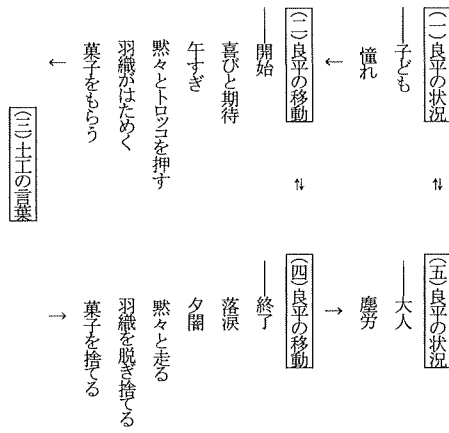
(五)良平は、二六歳になり、妻子とともに東京へ出て、雑誌社の仕事をしてゐるのだが、彼は、塵勞に疲れた様子である。

なお本稿では、良平がトロツコに乗ることを土工により許され、トロツコによる往路と、徒歩および走り戻ることにによる復路、さらに、家に帰りつくま

での一連の出来事を、「良平の訪問」と呼ぶことにする。

三、裏返し構造

本節では、前節における『トロッコ』のあらすじに付した漢数字にしたがって作成した図式を示す。



『トロッコ』のストーリーは、(一)→(二)→(三)→(四)→(五)という順序で進行する。また、かかる図式によれば、(一)と(五)、(二)と(四)、がそれぞれ同じテーマであると言える。なお、図式によれば、(三)が転回点であると言える。以下、テーマごとに、詳細に見てゆきたい。

まず、(一)と(五)は、共に、「良平の状況」がテーマである。(一)には、ト

ロッコに乗り込む前の八歳の良平が描かれている。こゝでの良平は、トロッコに乗り込むことに対し「憧れ」の気持ちを抱いている。かかる「憧れ」の気持ちは、土工になりたいという良平の気持ちの表れでもあり、ひいては、働く大人たちに対する憧れにも通じていると言える。一方、(二)→(三)には、大人になつた良平の日常が描かれている。こゝでの良平は、実際に雑誌社の仕事をしているのであるが「塵勞」に疲れている様子である。つまり、(一)と(二)における良平は、「子ども」と「大人」、仕事に対する「憧れ」と「塵勞」という対照的な状況である。

続いて、(二)と(四)である。両者は共に、「良平の移動」をテーマとしている。(二)には、「良平の訪問」の開始が描かれている。こゝでは、良平は、当初、「喜びと期待」の気持ちを抱いており、かかる訪問の開始は、「午すぎ」であった。良平は土工たちと一緒に黙々とトロッコを押すことにより、訪問が開始される。また、トロッコに乗つた良平の羽織がはためく様子が描かれ、途中の茶店では、良平は菓子をもちょう。対し、(四)には、「良平の訪問」の終了が描かれている。また、家に着いた良平は「落涙」し、訪問終了時には既に「夕闇」となつていた。さらに、良平は土工たちと離れたのち、一人黙々と走る場面が描かれ、帰路では、良平は菓子を羽織を捨てている。つまり、(二)と(四)における、訪問の「開始」と「終了」、良平の「喜びと期待」の様子と「落涙」の様子、周囲が「午すぎ」で明るいことと「夕闇」ですでに暗くなつていくこと、「良平の移動」が黙々とトロッコを押す「様態である」と「黙々と走る」様態であること、「羽織がはためく」と「羽織を脱ぎ捨てる」と、「菓子をもちょう」と「菓子を捨てる」とは、それぞれ対照の関係にあると言える。

(三)は、「土工の言葉」をテーマとしている。「良平の訪問」は、土工の言葉を直接的なまぎかけとし、トロッコによる往路から、自らの足による復路へと転じることとなる。なお、この点は、「イザナギの黄泉国訪問譚」でイザナギが「腐敗した女神を見る」(⑤)ことを直接的なまぎかけとして、イザナギは

往路から復路へと転じた様子と類似している。このように、(三)は、訪問の往路と復路の切り替えに位置している。さらに、「イザナキの黄泉国訪問譚」の⑤が当該図式における転回点に位置しているのと同様、『トロツコ』の(三)は、『トロツコ』の図式の転回点に位置している。

以上を、一節で述べた裏返し構造の特徴と照合してみたい。(二)での図式に基づけば、物語の前半では、テーマは(一)「良平の状況」→(二)「良平の移動」という順序で出現するのに対し、物語の後半では、逆に、(四)「良平の移動」→(五)「良平の状況」という順序で展開している。かかる点は、「特徴①」と合致している。さらに、(一)と(五)は、共に、「良平の移動」をテーマとしているのだが、双方は対照的な関係である。また、(二)と(四)は、共に、「良平の移動」をテーマとしているのであるが、双方は対照的である。かかる点は、「特徴②」と合致している。以上より、図式にみとめられる特徴は、特徴①ないし特徴②の双方に合致しているため、この構造は裏返し構造である。

四、土工の言葉

本稿の一節で紹介したように、大塚論文では、土工が良平にかけた言葉に注目しており、かかる言葉をきっかけに、「受動的」な良平から「能動的な良平へと」「新生」したことが述べられている。土工が良平にかけた言葉とは具体的には、「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するから」というものであった。その言葉に対する良平の反応は次の通りである。なお、ここでは、芥川原文を引用することとする。

良平は一瞬間呆気にとられた。①もうかれこれ暗くなる事、②去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事、③それを今からたゞ一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかったのである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思

った。泣いている場合ではないとも思った。彼は若い二人の土工に、取つて附けたような御時宜をすると、どんどん線路伝いに走り出した。

つまり、土工の言葉を聞いた良平は、「一瞬間呆気にとられた」のであるが、その理由は、以下の①～③が明らかにきたからである。

【明らかに来たこと】

①もうかれこれ暗くなる事

……………今はいつなのか

②去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事

……………今はいつなのか

③それを今からたゞ一人、歩いて帰らなければならない事

……………これから何をしなければならぬか

換言すれば、土工の言葉の前の段階では、良平は、「今はいつなのか、これはどこのか、これから何をしなければならないか」が曖昧であり、こうした現実を直視することができなくなっていたと言える。あるいは、こうした現実をぼんやりとは理解していたとしても、良平には、土工たちが「なんとかしてくれ」という気持ちによって占められていたと言える。いずれにせよ、大塚論文が指摘するように、良平は「受動的」であつたと言える。だが、土工たちの言葉をきっかけに、良平は、こうした現実を「能動的」に受け入れ対処を開始するのである。以上のように、土工たちの言葉によつて、良平は「受動的」な気持ちから「能動的」気持ちへと「新生」した。しかるに、良平は、それまでのトロツコによる往路から、自分の足で進むことによる復路へと転回する決断を下すのである。

それでは、かかる、土工の言葉による良平の「新生」が、『トロツコ』の中いかなる場所に配置されているかを、本稿三節の裏返し構造の図式と照合し

てみることにする。図式によれば、土工の言葉および良平の「新生」は、(二)に配置されている。つまり、図式全体から見れば転回点に位置している。しかるに、かかる箇所における良平の心的変化良平の「新生」は、物語全体を前半から後半へと移行させる効果をもたらしたのであり、逆に言えば、裏返し構造を前提とすれば、『トロロコ』は、良平の心的変化を軸に構成されていると言え。

五、転回点の機能

本節では、『トロロコ』の転回点である(三)と、「イザナギの黄泉国訪問譚」の転回点である⑤を対比する。一節では、「イザナギの黄泉国訪問譚」の転回点である⑥の特徴について述べた大林論文の見解を引用した。また、大林論文の別の箇所には「イザナギの黄泉国訪問譚」の主人公であるイザナギは、黄泉国を訪問した際、「女神の身は腐敗して蛆がたかり、身体の各部に八柱の雷神が化生しているのを発見して驚愕した」ことである。このショックを転回点として話は前半から後半にうつり、逆の方向に進行を始めること書かれている。つまり、イザナギは、思いもよらない女神の姿に「驚愕し」、踵を返し、女神から走り去るのである。

テキスト

転回のきっかけ

主人公の気持ち

『トロロコ』

土工の言葉

呆気にとられる

「イザナギの黄泉国訪問」

女神の姿

驚愕する

『トロロコ』の場合、主人公は、思いもよらない土工の言葉に直面したことをきっかけに「呆気にとられ」、引き返す決断を下す。一方の、「イザナギの黄泉国訪問譚」でも、主人公は、思いもよらない女神の姿に「驚愕し」、やはり引き返す決断を下す。双方は、主人公が直面したものが「言葉」と「姿」の

違いこそあるのだが、それによりショックを受けて引き返すという点では共通している。

さらに、前節で述べたように、『トロロコ』の主人公である良平は、ショックをきっかけに、「受動的」な気持ちから「能動的」な気持ちへと「新生」した。それでは、イザナギの場面はどうであろうか。以前の拙稿ではかかる点について次のように述べている。

異化した現実を受け入れられないイザナギは、死んでしまった妻を取り戻すという、いわば過去へと戻る選択をし、イザナミのもとへ行く。その際、イザナギは、一種、高揚感に似た気持ちであったに違いない。ところが、イザナギは、「見るな」の禁を破り、その高揚感は一挙に失われる。

その後、一目散にこの世に戻るのだが、その際、イザナギはイザナミと決別し、新たな日常を回復することになる。ここでは、イザナギは、異質化した日常を、イザナミとの決別と共に現実を受容し、その日常に馴化するのである。つまりこれは「異質馴化」である。

以上をまとめると、イザナギは、馴質異化→異質馴化という過程により、もともと日常(これを「旧日常」と呼ぶ)から新たな日常(これを「新日常」と呼ぶ)を獲得するに至ることになる。なお、イザナギの異質馴化に大きく影響を与えた出来事は、「見るな」の禁を犯すことによりイザナミの黄泉での姿を直視した」ことである。これにより、それまで幻想的な高揚状態だったイザナギは一転し、驚愕と落胆の状態になる。だが、この世への坂を必死で走り、追跡者から逃れるなかで、次第に現実を受け止めて行くのである。

イザナギは、思いもよらない女神イザナミの姿に直面しショックを受けたことを機に、女神の「死」という現実を受容できない状況から、女神の「死」を受容した現実の生へと移行した。また、イザナギは、女神の変わり果てた姿に直面する直前、「幻想的な高揚状態」にあったのだが、かかる女神の姿を直

視することをきつかけに「新日常」を受け止めたのである。

換言すれば、イザナキは、女神に会うことで「なんとななるのではないか」という気持ちであったと言えらる。つまり、イザナキは、シヨックの後で、「受動的」な気持ちから「能動的」な気持ちへと「新生」しているものであり、「女神の依存」の状態から「依存の否定」の状態へと移行したと言えらる。

テキスト

転回点前

転回点後

『トロッコ』

土工への依存

依存の否定

『イザナキの黄泉国訪問』 女神への依存

依存の否定

同様に、良平の場合も、転回点前後において、「土工への依存の状態からかかる「依存の否定」へと移行したと言えらるので、両物語における、転回点にまつわる主人公の心的状況は類似していると言えらる。

六 おわりに

本稿では、芥川の『トロッコ』を題材に、裏返し構造を当てはめることにより得られる知見と、大塚論文における、土工の言葉をつかきかけとする良平の「新生」に関する論を照らし合わせることににより、かかる良平の「新生」が物語中でいかなる役割を担っているか、の考察を行った。それによれば、良平の「新生」箇所は、「受動的」な良平から「能動的」な良平へ、「依存」の状態から「依存の否定」の状態へと移行する変化に関する描写箇所であると同時に、裏返し構造においては、物語全体を前半から後半へと移行させる役割を担当している箇所であることがわかった。換言すれば、良平のかかる心的変化を軸として、物語全体が裏返し構造により構成されていると言えらる。

本稿で題材とした『トロッコ』や、大林論文が提示した「イザナキの黄泉国訪問譚」の裏返し構造の場々は、転回点を持つタイプに属していると言えらる。

それでは「イザナキの黄泉国訪問譚」以外の場合はどうか、また、転回点を持たないタイプではどうか、という点については、今後検証したいと思てい

① 大林太良「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』三、号 日本口承文芸学会 一九七九年一月一・九頁

② 本稿では、これを「統一的」と呼ぶ。

③ 本稿では、これを「系列的」と呼ぶ。

④ 依田千百子「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』五号 日本口承文芸学会 一九八二年五月 四七・五七頁

⑤ 大林論文では「イザナギ」ではなく「イザナキ」という呼称を採用している。

⑥ 本稿では、これを「裏返し構造の特徴」と呼ぶことにする。

⑦ 本稿では、これを「特徴①」と呼ぶ。

⑧ 引用文中では、前半要素と後半要素が「否定」ないし「対立」の関係にあるものを裏返し構造の特徴における要素の関係としているのだが、大林論文の別の箇所では、これに「対照」の関係を追加している。本稿では、「否定」・「対立」・「対照」の少なくともどれか一つに該当する関係を「裏返し」と呼ぶことにする。

⑨ 本稿では、これを「特徴②」と呼ぶ。

⑩ 裏返し構造における、物語の前半から後半へと移行する切り替え部分を、本稿では「転回点」と呼ぶ。

⑪ 大塚浩「芥川龍之介研究―『トロッコ』の考察を通して」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』四七号 静岡大学教育学部 二〇一六年三月 一七・二七頁

⑫ ただし、イザナキの場合は、往路・復路ともに自らの足によるものである。

⑬ 芥川龍之介「蜘蛛の糸・杜子春」新潮社 一九六八年一月。

⑭ 引用文中の数字、傍線は筆者によるものである。なお、原文ではルビが付されているが、引用文では、便宜上、ルビを省略している。

⑮ 良平にとり、土工の言葉が、全く予期しないものであったのかという点について、大塚論文は「本当に土工たちの「ある言葉」は、良平にとって全く予

期せぬ突然の通告であつたのであろうか、ということである。なぜなら、この時の良平は、自らに迫り来る危機に対し、決して無自覚かつ漫然と時間を過ごしていたわけはなかつたと考へるからである。」と述べている。

この点に付き、大塚論文は、良平が「土工たちへの身勝手な期待や依存」の中にいたと述べている。

『拙稿』異郷訪問譚と状況対応リーダーシップ理論の対照―「馴質異化」と「異質馴化」の観点から― 『民俗文化』六三六号 滋賀民俗学会 二〇一六年九月 七三六―七三六二頁。

『拙稿』では「イザナギ」ではなく「イザナギ」という呼称を採用している。『転回点を持たない裏返し構造も知られている。』

(おおぎたのりあき／民俗学研究者)